

哲学教育の意義の考察 —教育に関する議論を参考に—

安東 晋

「哲学」という学問を専攻していない、哲学に携わる将来設計を持たないにも拘らず、高校「倫理」や大学「哲学」などの授業を受けている若者が国内に多くいる。その現状をみると、哲学を学ぶことの意味について考えさせられる。実際に哲学を学んでいる者の多くが「哲学を学ぶ意味」について知らない現状があるならば、彼らに哲学を学ぶ意味を教えなくてはならない。そうして、それを教えるべき教員の多くも、やはり哲学教育の意義について判然としていないのであれば、その答えを出す努力をしなくてはならない。

近年、「哲学教育」を題材としたシンポジウムやワークショップが増え、哲学教育の在り方を巡っての議論が激化している。社会状況の変化によって学びの意味が問われている今、哲学教育の現状が国内の社会状況に適しているのか、これについて改めて考える時期がきている。この間いに対して、近年の哲学教育に関するシンポジウムやワークショップを参考にすることで、哲学教育関係者の意見に耳を傾け、教育の現場が求めているものについて考察した。

その結果、哲学教育関係者はその注目を、高等教育から中等教育に移していることが分かった。また、分析によって哲学教育に期待されるものが「思想的教養」「課題発見能力」「疑う力」「問いと自身を結ぶ力」「他者理解」「多元的なものの見方」「思考を維持する力」「課題解決能力」といった能力向上である事が判明した。

また近年行われる哲学教育に関する議論には、テキスト利用を重視する従来型の授業について充分議論を深めないまま非難し、哲学的対話に重点をおいた比較的新しい形式の授業を推奨する意見だけが持ち上げられる風潮があるという問題点が見られた。本研究ではこれに対し、哲学教育に期待される学習効果として「思想的教養」を発見したことにより、一部の学生にとって一見「役に立たない知識」を教える従来型の授業にも現代社会の求めに応じた意義が存在することを示し、今後の議論充実を訴えた。

(指導教員 横山 幹子)